

春琴抄

谷崎潤一郎著

創元社發行

春琴抄

完

附

小說

蘆刈

戲曲

顏世

精選 名著複刻全集 近代文学館

昭和55年 4 月 20 日 印刷

昭和55年 5 月 1 日 発行

(第11刷)

谷崎潤一郎著

春 琴 抄

創元社版

刊 行	財団法人 日本近代文学館 東京都目黒区駒場 4 - 3 - 55 代表者 小 田 切 進
編 集	名著複刻全集編集委員会 代表者 稲 垣 達 郎
総発売元	株式会社 は る ぶ 東京都新宿区新宿 2 - 19 - 13 代表者 中 森 蒔 人
製 作	株式会社 はるぶ出版 東京連合印刷株式会社

このページ(表・裏)は本複刻に
当たり新たに加えたものです。

目錄

春琴抄

一頁

蘆刈

百九頁

顏世

百九十九頁

春琴抄

○

春琴、やんたうの名は鵜屋琴、大阪道修町の藥種商の生きて歿年は明治十九年十月十四日、墓は市内下寺町の淨土宗の某寺にある。先達通りかゝるにお墓参りをやる氣になり立ち寄つて案内を乞ふと「鵜屋さんの墓所はあちらでございます」といつて寺男が本堂の宇しろの方へ連れて行つた。見ると一と叢の椿の木かげに鵜屋家代々の墓が數基ならんでゐるのであつたが琴女は墓らしいものはそのあたりには見あたゐなかつた。むかし鵜屋家の娘にまかゝる人があつた筈ですがそれ人のはといふと暫く考へてゐて「それならあれにあり

ますのがおれかも知りませぬ」と東側の急な坂路になつてゐる段々の上へ連れて行く。知つての通り下寺町の東側のうしろには生國魂神社いくたまのある高臺が聳えてゐるので今いふ急な坂路と寺の境内からその高臺へはぐく斜面なのであるが、おれは大阪にはおよつと珍しい樹木の繁つた場所であつて琴女お墓はその斜面の中腹を平らにしたきゝやかな空地に建つてゐた。光譽春琴恵照禪定尼、と、墓石の表面に法名を記し裏面に俗名鵜屋琴、號春琴、明治十九年十月十四日歿、行年五拾八歳とあつて、側面に、門人わくみ温井佐助建之と刻してある。琴女は生涯鵜屋姓を名のつてゐたけれども「門人」温井檢校と事實上の夫婦生活をいとなんでゐたので斯く鵜屋家の墓地と離れたところへ別に一基を選んだのであらう。寺男の話では鵜屋の家はやうに没落してしまひ近年は稀に一族の者がお参りに来るだけであるがそれも琴女の墓を訪ふことは殆んどないのでこれが鵜屋さんの身内のお方のものであらうとは思はなかつたといふ。すると此の佛さまは無縁になつてゐるのですかといふと、

いえ無縁といふ譯ではありませぬ萩は茶屋の方に住んでをられる七十恰好の老婦人が年に一二度お参りに來られます、そのお方は此のお墓へお参りをされて、終れから、それ、此處に小さなお墓があるでせうと、その墓の左脇にある別な墓を指し示しながらつとその處とで此のお墓へも香華を手向けて行かれますお経料などもそのお方がお上げになりますといふ。寺男が示した今の小さな墓標の前へ行つて見ると石の大きさは琴女は墓の半分くらゐである。表面に眞譽琴臺正道信士と刻し裏面に俗名溫井佐助、號琴臺、鵬屋春琴門人、明治四十年十月十四日歿、行年八拾三歳とある。即ちこれが溫井檢校の墓であつた。萩は茶屋の老婦人といふのは後に出て來るから此處には説くまい、此の墓が春琴の墓にくらべて小さく且その墓石に門人である旨を記して死後お師弟の禮を守つてゐるところに檢校の遺志がある。私は、折柄夕日が墓石の表よあか／＼と照つてゐるその丘の上にゐて脚下にゐるが大大阪市の景觀を眺めた。蓋し此のあたりは難波津に昔あらある丘陵地帯

で西向きの高臺が此處からずつと天王寺の方へ續いてゐる。そして現在では煤煙で痛めつけられた木の葉や草の葉に生色がなく埃まびきに立ち枯れた大木が殺風景な感玄を與へるがこれらの墓が建てられた當時はもつと鬱蒼としてゐたであらうし今も市内の墓地としては先づ此の邊が一番閑靜で見晴らしのよい場所であらう。奇しき因縁に纏はれた二人の師弟と夕靄の底に大ビルディングが數知れず屹立する東洋一の工業都市を見下しながら、永久に此處に眠つてゐるのである。それにしても今日の大阪は檢校が在りし日の倂をせめてぬ迄に變つてしまつたが此の二つの墓石れみは今も淺からぬ師弟の契りを語り合つてゐるやうに見える。元來溫井檢校の家は日蓮宗であつて檢校を除く溫井一家の墓は檢校の故郷江州日野町の某寺にある。然るに檢校が父祖代々の宗旨を捨て、淨土宗に換へたのは墓になつても春琴女れ側を離れまいといふ殉情あつたもので、春琴女の存生中、早く既に師弟の法名、此の二つの墓石の位置、釣り合ひ等が定免られてあつたといふ。目分量で測つ

たところでは春琴女の墓石は高さ約六尺、檢校のは四尺に足らぬ程であらう。二つは低い石、甃の壇の上に並んで立つてゐて、春琴女は墓の右脇に、一と本の松もみぢが植ゑてあゝ緑の枝が墓石の上へ屋根のやうに伸びてゐるのであるが、その枝の先が屈なくなつた左の方の二三尺離れたところに、檢校の墓が鞠窮如として侍坐する如く控へてゐる。それを見ると生前、檢校がまゝくしく師に事へて影の形に添ふやうに扈從してゐた有様が、偲ばせ恰も石に靈があつて今日もなほその幸福を樂んでゐるやうである。私は春琴女は墓前に跪いて恭しく禮をした後、檢校の墓石に手をかけて、その石の頭を愛撫しながら、夕日が大市街の彼方に沈んでゐるまで丘の上へ徘徊してゐた。

○

近頃私の手に入れたものは「鵬屋春琴傳」といふ小冊子があり、此れが私の春琴女を知るに至つた端緒であるが、此の書は生漉きの和紙へ四號活字で印刷した三十枚程のもので、察する

せころ春琴女の三回忌に弟子の檢校が誰かに頼んで師の傳記を編ませ配り物にでもしたのであらう。されば内容は文章體で綴つてあり檢校のおとも三人稱で書いてあるけれども恐らく材料は檢校が授けたものに違ひなく此の書のほんふうの著者は檢校その人であるとして差支へあるまい。傳に依ると「春琴の家は代々鵜屋安左衛門を稱し、大阪道修町に住して藥種商を營む。春琴の父に至りて七代目也。母しげ女は京都駄屋町の跡部氏の出にして安左衛門に嫁し二男四女を擧ぐ。春琴はその第二女にして文政十二年五月二十四日を以て生る」とある。又曰く、「春琴幼にして穎悟、加ふるに容姿端麗にして高雅なること譬へんに物なし。四歳の頃より舞を習ひけるに舉措進退の法自ら備はりてぎす手なく手の優艶なること舞妓も及ばぬ程なりければ、師もしば／＼舌を卷きて、あこれ此の兒、此の材と質とを以てせば天下に嬌名を謳はせんこと期して待つべきに、良家の子女に生れたるは幸とや云はん不幸とや云はんと眩しとかや。又早くより讀み書きの道を學ぶに上達頗る速か

にして二人の兄をさへ凌駕したりき」と。これらの記事が春琴を視ること神の如くであつたらしい檢校から出たものとすればどれほど信を置いてもいかならないけれども彼女の生れつきの容貌が「端麗にして高雅」であつたことはろくな事實から立證される。當時は婦人の身長が一體に低かつたやうであるが彼女も身の丈が五尺に充たず顔や手足の道具が非常に小作りで纖細を極めてゐたといふ。今日傳はつてゐる春琴女が三十七歳の時の寫眞といふものを見るのに、輪廓の整つた瓜實顔に、一つ一つ可愛い指で摘まみ上げたやうな小柄な今にも消えてあくなりさうな柔かな目鼻がついてゐる。何分にも明治初年か慶應頃の撮影であるからところ／＼に星が出たりして遠い昔れ記憶の如く寫すれてゐるのでそのゝめにさう見えるのでもあらうが、その朦朧とした寫眞では大阪の富裕な町家の婦人らしい氣品を認められる以外に、宮つくしいけれども此れといふ個性の閃光がなく印象の稀薄な感じがする。年恰好も三十七歳といへばさうも見え又二十七八歳のやうにも見えな

くはない。此の時の春琴女は既に兩眼の明を失つてから十有餘年の後であるけれども盲目といふよりは眼をばぶつてゐるといふ風に見える。嘗て佐藤春夫が云つたことにろうしゃ聾者は愚

人のやうに見え盲人は賢者のやうに見えるといふ説があつた。なぜあらばんばは人の言ふことを聽かうとして眉をまかめ眼や口を開け首を傾けたり仰向けたりするので何となく問の抜けたところがある然るに盲人は靜かに端坐して首をうつ向け、瞑目沈思するかの如き様子をするあらばかにも考へ深さうに見えるといふのであつて果して一般に當て嵌まるかどうか分らないがそれは一つには佛菩薩の眼、慈眼視衆生といふ慈眼なるものは半眼に閉ぢた眼であるからそきを見馴れてゐるだけ／＼は開いた眼よりも閉ぢた眼の方に慈悲や有難みを覚え或る場合には畏れを抱くのであらう。されば春琴女の閉ぢた眼臉もそれが取り分け優しい女人であるせぬか古い繪像の觀世音を拜んだやうなやのゝな慈悲を感じるのである。聞くとところに依ると春琴女の寫眞は後にも先にも此れ一枚しかないのであると

いふ彼女が幼少の頃はまだ寫眞術が輸入されてをらず又此の寫眞を撮つた同じ年に偶然或る災難が起りそれより後は決して寫眞などを寫さなかつた筈であるから、それ／＼は此の朦朧たる一枚の映像をふよりに彼女の風貌を想見するより仕方がない。讀者は上述の説明を讀んでどういふ風な面立ちを浮かべられたか恐らく物足りない不んやりしたものを心に描かれたであらうが、假りに實際の寫眞を見られても格別これ以上にとつきり分るといふことはなからう或は寫眞の方が讀者の空想されるものよりもつと不やけてゐるであらう。考へてみると彼女が此の寫眞をうつした年即ち春琴女が三十七歳の折に檢校も亦盲人になつたのであつて、檢校が此の世で最後に見た彼女の姿は此の映像に近いものであつたかと思はれる。すると晩年の檢校が記憶の中に存してゐた彼女の姿も此の程度にぼやけたものではなかつたであらう。それとも次第に空すれ去る記憶を空想で補つて行くうちに此れとは全然異なつた一人の別な貴い女人を作り上げてゐたであらうか

○

春琴傳は續けて曰く、「されば兩親も琴女を視ること掌中の珠の如く、五人の兄妹達に超えて獨り此の兒を寵愛しけるに、琴女九歳の時不幸にして眼疾を得、幾くもなくして遂に全く兩眼の明を失ひければ、父母の悲歎大方ならず、母は我が兒の不憫さに天を恨み人を憎みて一時狂せるが如くなりき。春琴これより舞技を斷念して専ら琴三絃の稽古を勵み、絲竹の道を志すに至りぬ」と。春琴の眼疾といふのは何であつたか明かでなく傳にも此れ以上の記載がないが後に檢校が人に語つてはことに喬木は風に妬まれるとやら、お師匠さまは御器量や藝能が諸人にすぐれて洩られたむかりに一生のうちに二度までも人の嫉みをお受けなされたお師匠さまの御不運は全く此の二度の御災難のお蔭ぢやと云つたのを思ひ合はせれば、何かその間に事情が伏在するやうでもある。檢校は又お師匠さまのは風眼であつたとも云つた。春琴女は甘やかされて育つた、兎に驕慢なところはあつたけれども言語動

作が愛嬌に富み目下の者への思ひやりが深く加ふるに至つて花やかな陽氣な性質であつたから、人毎たりもよく兄弟仲も睦じく一家中の者に親しまれたが一番末の妹に附いてゐた乳母が兩親の愛情の偏頗なのを憤つて密かに琴女を憎んでゐたといふ。風眼といふものは人も知る如く花柳病の黴菌が眼の粘膜を侵す時に生ずるのであるから檢校の意は、蓋し此の乳母が或る手段を以て彼女を失明させたことを諷するのである。まかし確かな根據があつてさう思ふのか檢校一人だけの想像説であるのか明瞭でない。春琴女が後年の烈しい氣象を見れば或ひはさういふ事實が性格に影響を及ぼしたのかとも猜せられなくはないが此の事に限らず檢校の説には春琴女は不幸を歎くあまり知らず識らず他人を傷つけ呪ふやうな傾きがあり俄かに悉くを信ずる譯に行かない乳母の一件なども恐らくは揣摩憶測に過ぎないであらう。要するに此處では敢て原因を問はず唯九歳の時に盲目になつたことを記せば足りる。そして「あれより舞技を斷念して専ら琴三絃の稽古を勵み、糸竹の道を志」し

た。はまり春琴女が思ひを音曲に込めたるやうになつたのは失明した結果だといふことになり彼女自身も自分のほんたうの天分は舞ひにあつた、己たしの琴や三味線を褒める人があるのは己たしといふものを知らないゝだ眼さへ見えたら自分は決して音曲の方へは行かなかつたのにと常に檢校に述懐したといふ。これは半面に自分の不得意な音曲でさへ此のくらゐに出来るといふ風に聞え彼女の驕慢な一端が窺はれるが此の言葉なども多少檢校の修飾が加はつてゐはしないゝ少くとも彼女が一時の感情に任せて發した言葉を有難く肝に銘じて聽き、彼女を偉くもるために重大な意味を持たせた嫌ひがありはしないか。前掲の萩れ茶屋に住んでゐる老婦人といふのは鴨澤でるといひ生田流の勾當で晩年の春琴と溫井檢校に親しく仕へた人であるが此の勾當の話聞くに、お師匠さま「春琴のこと」は舞ひがお上手だつたさうにござりますが琴や三味線も五つ六つの時分から春松といふ檢校さん到手やどきをしてお貰ひなされそれからずつと稽古を勵んでをられました、それ故盲目に

なつてから始めて音曲を習はれたのではないのでござります、よいお内の娘さん方は皆早くから遊藝のよいことをされますのがその頃の習慣でござりましたお師匠さまは十の歳にあのぞづかしい「残月」の曲を聞き覚えて獨りで三味線にお取りなされたと申し升さうしてみれば音曲の方にも生れつきの天才を備へてをらされたのでござりませうなか／＼凡人には真似られぬこととでござりますゝ盲目になられてからは外に楽しみがござりませぬので一層深く斯の道へお這入りなされ、精魂を打ち込まれたのかとぞんじますとのことである。多分此の説の方がほんたうなので彼女の眞の才能は實は始めより音樂に存したのであらう舞踊の方は果してどの程度であつたか疑はしく思はれる

○

音曲の道に精魂を打ち込んだとはいふものゝ生計の心配をする身分ではないから最初はそれを職業にまとうといふ程の考へはなかつたであらう後に彼女が琴曲の師匠として門戸を